

鴨東通信

秋

2016.9 No.103



●日常語のなかの歴史16
ようじよう【養生】

渡邊智子

●てーたいむ

園城寺の仏像をたずねて

福家俊彦 寺島典人

●本づくり温故知新4(最終回)

森田和紙

●エッセイ

死と生の不思議な関係

樋口章信

「誓願寺門前図屏風」を歩いてみると

西山剛

お金のリアリティ

安国良一

●リレー連載 世界のなかの日本研究24

台湾の東洋美術専門書店から

民谷伊左子

●史料探訪64

千里ニュータウンとバスオール

五月女賢司

熊倉功夫著作集

全7巻

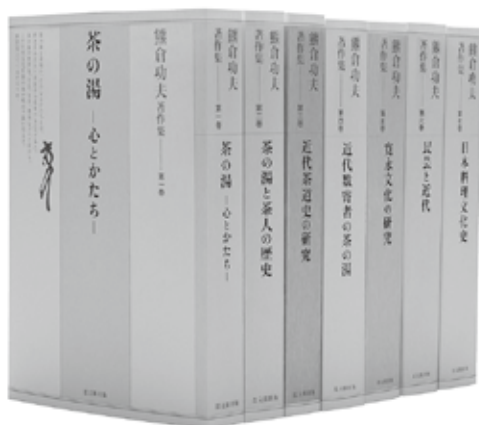
茶の湯・民芸・食文化など、文化史の諸領域にわたる著者の広範な業績を全7冊に

〔全巻構成〕

第1巻	茶の湯―心とカタチ―	平成28年(二〇一六)	7月刊行
第2巻	茶の湯と茶人の歴史		9月刊行
第3巻	近代茶道史の研究		11月刊行
第4巻	近代数寄者の茶の湯	平成29年(二〇一七)	1月刊行
第5巻	寛永文化の研究		3月刊行
第6巻	民芸と近代		5月刊行
第7巻	日本料理文化史		7月刊行

■A5判・各巻平均四五〇頁

本体価格(各) 七、〇〇〇円



ようじよう【養生】

養生は、現在では、人にも植物にも工事作業にも使われているが、もともとは中国から伝来した言葉である。中国では周の時代（紀元前二〇世紀）に、医者は一番格式が高い食べ物で治す「食医」、次に薬を使って治す「傷医」、その次にメスを使って治す「瘡医」、さらに獣を扱う「獸医」に順位付けされていた。食医は、「食養・食事に注意して養生すること」と「食療・食事によって治療すること」を仕事とし、現在の栄養士とも言える。

さらに、中国では老子や荘子の思想にみられるように養生（生を養うこと。人間の身体を整えること）の考え方が発達した。養生は健康を保つことや、傷病を治癒するために保養すること、心身ともに健康を保つ知恵、生き方でもある。

この養生の考え方は、日本では貝原益軒^{かいげんえきけん}による健康についての指南書『養生訓』（正徳二年（一七二二））により普及した。ここでは、最初に人間の尊厳性として、自分が生きているこ

日常語の歴史 なかの

16

◎日常語のなかで、歴史的語源やエピソードを取り上げ、研究者が専門的視野からご紹介します。

とは、いろんな人たちのおかげであること、自然の恵みによることを認識し感謝しなければならず、感謝の表現の最大なもの、健康で長生きすることである、などと述べている。また、「病は口から」「適量を守る」「腹八分の飲食」などと、重ねて記載し食事の大切さと共に過食を戒めている。一方、

病人の望みを叶える法（食べて害になるものや冷水などは与えてはいけないが、飲み込まないで味だけを味あわせるのならかわない）も示されている。このことは、養生が心身への配慮であることを示している。

このような考え方も踏まえ、小石川養生所が享保七年（一七二二）にできた。

養生は広辞苑をみると、これらに加え工事個所の防護をすることや、植物の生育を助成・保護するために手当てをすることとの意味もある。これは、養生の対象が人から植物や物にまで広がったと言える。

一方、故事ことわざ辞典には、「諦めは心の養生」等が示されている。それぞれにあった心身の「養生」を見つけ、しなやかに実践したいものである。

（渡邊智子・千葉県立保健医療大学教授）

●今回の仏像公開がもつ意味

福家・園城寺（三井寺）の特徴は、秘仏が多いことです。第一巻に収録されている国宝の智証大師像（二体もそうだし）、第二巻は如意輪観音像と護法善神像、第三巻、第四巻のなかにもあります。これらすべてを、今回かなりきちっとしたかたちで載せています。

いまの時代はそういった「秘める」ということに対するハードルが下がっているというのか、各お寺の意識も「知ってもらおうことの方が大事」という傾向にあります。そういうなかで、うちの寺はいまでも秘仏の公開という機会が少ない方です。なかなかいままですら知ってもらう機会はありませんでしたが、今回はお寺としても覚悟をきめたようなかたちで公開しましたので、これが後世ずっと伝わってくれるのが一番の狙いです。調査も含めてですが、一般の方に押んでいただくようにしようと思っても、なかなかやりにくい条件がいまでもありますので、一般の人にとっても研究者にとっても、この本が活躍すれば良いと思いますね。

——「秘仏」とされる意味とは

福家…そもそも秘仏とはなにか。私は、秘仏と

ていーたいむ

おん じょう じ 園城寺の仏像をたずねて

ふ け とし ひこ
福家俊彦

（園城寺（三井寺）執事長）

てら しま のり ひと
寺島典人

（大阪市歴史博物館学芸員）

はひとつの制度だと思っています。

本来仏さんや神さんは目に見えない、人間のことばでは表現できない存在です。でもそれのことばに翻訳したらお経に、ひとつのイメージを結晶化させたらお像になる。

そのお姿を「見せない」とかそういうことではなく、扉を閉めることで、目には見えないけれどもおられるという、その存在をどう我々が感じとって対話するのか考える機会となる。

それを制度化したものといえるのではないのでしょうか。とはいえ学術的なことは当然必要ですから、我々の足下を固めるという意味でも、今回の本には大きな意味があります。

研究するということは、秘仏を観念するのはまた別のかたちの仏さんとの対話の仕方であり、今後そういうあり方が広がっていくのかなと思います。

——大きい転換ですよね、お寺にとっては

福家…今回出版に踏みきったことで、これから秘仏というものを守っていくという我々の考え方、お寺の自己認識というものが、当然少し変わってくるでしょう。

また秘仏に限らず、国宝とか重文以外のいわ

ゆる未指定のものについても、それがお寺にとって、また社会にとってどういう意味があるのかを説明してつぎの世代に渡したい。そうしないと今後、どういう時代になるかわかりませんし、失われてしまうことがあるかもしれません。現にそういったことが歴史的にあるわけです。できるだけそういう可能性を消すために、調査や撮影をずつと行ってきたので、この本は私としては園城寺の仏像の集大成になるのかなと。これが出版されていればつぎの人たちに大体わかってもらえるという、お寺としてはそういう意味合いもありますね。

●学術調査での発見

寺島…調査でわかったことは色々ありますが、第一巻の智証大師像で言いますと、御骨大師^{おこつだいし}さんと中尊大師^{ちゆうそんだいし}さんでは、痛み具合が全然違うんですよ。

どちらも現在では秘仏になっていますが、中尊大師は表面の保存状態が良いの、御骨大師は剝落が進んでいる。ということ、は、たぶん扉を開いていた時期が長くあったのではないかと思えます。

また、御骨大師はほとんど智証大師そのまま、当時なりのリアルさで造られているのに対し、中尊大師は大分理想化された、まつる存在として観念化された造形になっています。そういう部分が、扱いの違いとか、表面の状態の違いを生んだのかもしれない。扉の向こうに神仏としてあった中尊大師と、実際に目の前にして拝まれていた御骨大師という。

――調査で苦労されたことは

寺島…秘仏ということではなかなか写真撮影をする機会を得るのがむずかしかった。二〇〇八年から九年に大阪・東京・福岡で国宝三井寺展がありました、そういった機会を利用して、少しずつ撮影してきました。

福家…こういう本を将来なにかのかたちでおおやけにするべきだという思いがあったのですが、いつでも撮影できるものではないし、いづれ機会がきた時にらせるように、いろんなタイミングをかりながら進めたので、準備にはかなり時間をかけました。

寺島…円珍^{えんしん}さん（智証大師）のお像は、大津市歴史博物館で展示した時に撮影しました。新羅明神^{しんらめいじん}さんは、お堂の屋根の葺き替え修理の際、神様の上に人が乗るわけにはいかないということで大津博に避難された時に。如意輪観音^{にぎりんくわんおん}さんは三年のご開扉の時に。福家…そのような状況のなか、仏像を一〇年くらいで撮影できた、調査してもらえたというのは非常に得難いことでした。ある意味「短期間に」機会が重なって出版できた。

撮影の機会もそうですが、人との出会いもそうです。今回たまたま一定の理解をしてくれる人、寺島さんがいて、撮影の機会が巡ってきた。ふしぎな巡り合わせがきたんだなあと思いますね。

●『園城寺の仏像』の特色

寺島…いままでの本は、正面からの写真と像の大ききくらしいしかデータがありませんでした。今回はいろいろな所の大ききさや、どういう構造になっているのかという情報、調書を、初めて載せま

す。

福家…調査には結構時間もかけてもらったしね。

寺島…はい。総論は良いんですけど、調書を書くのが一番大変なんですよ。嘘を書くわけにはいかないの。総論はまあ多少言い過ぎたかなということがあっても良いかなと思うんですけど(笑)、調書はそれを元にあの研究者が研究するので。つぎにもう一度見にこうといって見にいけるようなものではないので、それはもう責任重大でしたね。

今日も光浄院のお不動さんを見ていたんですけど、古いですね。今までは鎌倉かなあという意見もありましたけど、平安で間違いないと思います。ひよつとしたら一一世紀とか。

そういう古い仏さんが普通においてあるんですよ。なので私が書く文章が、だんだん増えていくんです。毎年収録するべき像が増えていくので。それが本づくりに良いのか悪いのかわかりませんが(笑)

それと、お像の写真を大きくするべきかどうか、毎日それで悩むんです。小さくていいかなと思った像でも、よくよく見ていると立派なので、もうちょっと大きくするべきだというのがでてくるので。でもページは増やせないの、どう入れ込んでいくのかというのが大変です。

福家…寺島さんが一生懸命調査してくれたなかで見出していったものが結構含まれているので、今回の本は未指定の仏像にもかなり大きなインパクトがあると思います。とくに専門の人ほど、こ

ういうのがあったんや、というのがあるのではないのでしょうか。専門の人でも知らないものがあると思うの。

二〇年、三〇年前の私自身が感じていた個別の仏像に対する理解度も全然変わってきました。時代がそんなに古くはないだろうと思っていたものが、結構古い。

我々としては先人がずっと守ってきたという歴史を背中に背負っているの、こういうふうになんとしたかたちで情報をいただくと、もちろんぞんざいなことはできないし、伝えていかなあかな、というこちらの覚悟も改められます。

秘仏として今回の本に出る仏像は、我々としてはある程度決定的な意味合いがあります。初めて基本的な調査データ、調書のついたものを公開しますの。

いっぽうで、いままであまり知られていなかった未指定の彫刻のなかにも、意味のあるものがたくさん含まれているというのは、みなさんあまりご存じなかった情報だと思います。

なのでこの本には、秘仏と未指定という、ふたつの大きな特色があるのではないのでしょうか。

寺島…仏像を勉強したり、好きな人たちにとってみたら、そういう立派な像がたくさんあるんだなというのが、この本だけでわかりますからね。あと彫刻をつくっている人は、真正面からだけでなくいろんな角度からの写真が見られる。各時代の代表選手がそろっていますから、それを見るだけでもすごく参考になると思いますね。

●智証大師の感得した像

——各巻の必見ポイントを教えてください

寺島…第二巻はやはり如意輪観音さんがすばらしいですね、平安中期です。西国の札所、三十三所巡礼のいつてみれば親玉の観音さんなので。三十三所巡礼を始めたのは三井寺のお坊さんですから、始める時に自分のお寺の観音さんをどれにしようかと、たぶん悩まはったと思うんですよ。それでわざわざあのお像を選んだ。よほどの思い入れがあったと思いますね。なにかしらのおくらしがにあったはずですよ。それはいまだに私もわからないのですが、いろいろな思いがまつた観音さんで、その柔和な作風を含めてすばらしいです。

あとは護法善神さんもよくわからない不思議な像で、ほかに類例がありません。吉祥天とよく似た姿なので吉祥天なのかもしれないかもしれませんけど。それが仏ではなく神としておまつりされているという……わからないですね。護法善神というのは、如来とか菩薩といっているのと同じなんです。特別な名前ではない、固有名詞ではなく普通名詞です。「守る神様」といっているようなものだから、名前がないんです。新羅さんだったら新羅明神ですが、「明神」といっているのと同じです。

福家…これは円珍さんがこどもの時に現れた神だという伝承があつて、母親のイメージなんです。

寺島…感得像なんです。

黄不動さんも、黄不動さんしかないお姿なんです。ほかにない

不動明王、本当に不動明王なのかというくらい不思議な形なんです。それは円珍さんの頭に浮かんだ、感得したお姿なので、護法さんもひよっとしたらそうかもしれないです。

●数奇な運命をたどった千手観音

二巻目は如意寺の千手観音でもありますね。如意寺は京都の東山の、いまは大字山と呼ばれている所、あれは本来如意が嶽というのですが、そこから三井寺さんとのあいだの山中にありました。三井寺さんの別院です。だから三井寺さんの西の門はいまの南禅寺のあたりだったんです。なので、京都からみれば東側はみんな三井寺みたいな感じのイメージだったのですが、そこに如意寺という大きいお寺があつた。

それが応仁の乱くらいで、軍勢がはいつて荒れちゃうんですね。その時に三井寺さんにご本尊の千手観音を避難するんです。だから応仁の乱ぐらいからずっと三井寺さんに避難している。

その千手さんがまたおもしろくて。九世紀のお像なんです。でも如意寺の創建は九世紀まであがないんです。一〇世紀には確実にあつたんです。

で、すぐそばの山科に安祥寺というお寺があつて、その九世紀の資材帳に、北に松尾寺というお寺があつたと書いてあるんです。そのあたりを京都市が発掘すると九世紀の瓦とかが出てきて、九世紀にお寺がどうやらあつたらしい。それが如意寺の西方院というところのあたり、だから如意寺の前身寺院が松尾寺であつた可能性もあるかなと思います。

福家…如意寺は応仁の時に退転たいてんしますが、それでも江戸時代まで

は存続しています。かなり規模が大きいお寺でした。中世は、うちはあそこで伝法灌頂でんぽうかんじょうしています。

寺島…鎌倉時代にまた三井寺が焼き討ちにあった時ですね。ご本堂がないわけですから、焼け残った如意寺にご本尊を持っていたて灌頂したりとか、サブになるお寺だった時期もありました。

福家…だからうちにとってはとても大きな意味があるお寺だったと思います。

寺島…その数奇な運命をたどった千手観音さんがまだなんとか残っている。

福家…奈良国立博物館の仏像館にいつてもらえばいつでも拝めます。常設でおいでありますので。

●秘められし神羅明神

第三巻は新羅明神さんですね。これはほとんど紹介されていない、写真もほとんど出ていません。

寺島…二〇年くらい前、京都国立博物館・東京国立博物館で出陳しましたよね。その時は京博が先に展示しましたが、東博で「やっぱり出陳できなくなりました」となったらいけないというので、京都にずっと泊まりこんで、毎日新羅さんだけを見にきたという方がいらっしやるそうです。あの時は展示期間が短かったですよね。

福家…一週間でした。

寺島…そうそう拝めるものではないという。それが本になるわけ

です。第二巻と第三巻とあわせて、平安時代の仏像がずらりと並ぶのですが、三井寺さんは、いつてみれば京都の中心のお寺さんなので、当時の京都の一番良いレベルの仏像がそろっている。だから未指定の像もみんな良い、平安時代のりっぱなお像なんです。それが全部出ますので。

福家…なんべんも焼けてきたから、そんなに良いお像が大量に残っているというのは「結構残ってるんやな」という印象です。

平安時代にも南北朝にもかなり焼けているわけですから。大きな丈六仏じょうろくぶつが残っていないのは明らかに焼失したわけですが、持って運べる範囲の仏さんで、これだけ残ってるというのもちょっと驚きでしたね。とにかく仏さんを助けよう、持って逃げられるものは持って逃げようというのがあったと思います。秘仏はもちろんのことね。ほかのことをさしおいても、とくに智証大師さんにご縁のある、ゆかりの神仏はなんとしても守るというのがあったから残ったんだと思います。

寺島…調査中に見つけたんですが、御骨大師さんのお尻のところ（像底ぞうてい）に穴があいているんですよ。へっこんでる、ぶつかっただけなんです。だからたぶん落ちたことがあるんです。落ちて地面か何かの角がわかりませんが、ぶつかった跡が何か所かあって。何回も避難しているあいだにぶつけたんだと思います。それはない本当に必死で守って持っていくという状況が想像されることなので、あれを見みた時は結構胸が熱くなりましたね。よほど緊急事態で持っていたんだろーと思います。

●鎌倉彫刻の真骨頂

第四巻目はなんととっても黄不動さん。本当は絵画ですけど、あれは慶派けいはいなのかな。

寺島…慶派です。わたしは運慶うんけいの息子の湛慶たんけいだと思っています。

福家…あれは非常に保存状態が良いですね。修理をすれば慶派なりなんらかのサインが残っているのがわかると思いますが、修理なんて必要ないくらい保存状態が良いからね。

八〇〇年たってまったく修理が必要ないという、ものすごく、ある意味生々しいというか、いつできたん？ みたいな（笑）。

寺島…一二五年くらいですから本場にちよ
うど八〇〇年ですね。

福家…これもオリジナルの絵画と一緒に秘仏です。何年に一度開けるといふきまりはありません。何年か、めったに見られるものではない。寺島…黄不動さんは、正面から見るとちよつとどこちない感じなんです。国宝の絵を正面から写しているから。ところが横とかうしろから見ると筋肉隆々の、もう、背中の中筋とかすごいですよ。それはつまり、絵を参考にしないで良いわけで、造像上のしびりがありません。

正面からの写真しかいままでないんですよ。それが今回の写真を見たら、うしろとか



左：福島氏 右：福家氏

びつくりしますよ、背筋がガツて、水球やってるみたいな、ポーズイドンジャパンみたいな感じで（笑）。それでまた背中の肉がやわらかそうなの、本当に質感がすごくて。あれは鎌倉彫刻の真骨頂のひとつだと思いますね。

その写真を載せられるのは、非常に良いなあと思います。いろんな角度からの写真が出るというのは、立体物を研究する者にはありがたいです。正面からの一枚だけだとわからないですからね。福家…各巻秘仏が必ず載りますし、いままで専門家にも知られていなかった未指定のものも載りますので、これまでにない大きな意味をもった本になると思います。

寺島…今回像底の写真とかも載せてますから、そうなるとお像の造り方、構造がわかります。一般の人は像底なんか見たことないと思いますが、この本を見ると、ああ、こういうふうにつくるんだとか、造り方がいろいろあるんだとかがわかって、良い参考になると思います。

福家…そういう意味では、だいぶ画期的な内容になっているんじゃないでしょうか。既成の「園城寺の仏像」イメージはずいぶん変わると思います。（八月九日 於…園城寺）

▼24ページに書籍案内を掲載

本づくり 温故知新

本誌一〇〇号を記念して始まった連載もいよいよ最終回。今回は本づくりを支える、故くて新しい、和紙の世界をご紹介します。

版元集う京都の和紙問屋の先駆け

もりたわし
森田和紙



全国の和紙が保管されている倉庫。
湿気と日光に気を遣うそうです

『手漉和紙大鑑』

全国各地の美しい和紙に目を奪われます



連載の最終回を飾るのは、京都経済の中心地・四条烏丸からほど近い東洞院通にモダンな店舗「倭紙の店」をかまえる森田和紙さんです。もともとは越前（福井）の和紙の里で日用雑貨とともに和紙を漉く道具を商っていました。昭和二年（一九二七）に京都へ進出、当時まだめづらしかった日本全国にネットワークを持つ和紙問屋を始められました。京都に移る前は和紙を漉く機械の製造を手がけていた時期もあるそうで、和紙業界との深い縁を感じます。いまなお越前の和紙産地とは太いパイプで結ばれているとのこと。

出版業とのつながり

もともと版元が多い京都、戦争中の中断を経て再開した森田和紙の強みは、サイジング（にじみ防止）加工や平滑加工をほどにした《印刷に強い和紙》を豊富に扱っていたことでした。出版業の隆盛のなか、つぎつぎと出版された大型の美術全集などに紙を提供してきました。繊維質でインクがにじむイメージのある、一般によく目にする和紙とはまったく異なる、印刷用和紙の美しさにしばしば目を奪われました。

森田和紙の名を全国に広めたのは『手漉和紙大鑑』（毎日新聞社、一九七三〜七五年）の出版でした。同書は当時日本全国に存在したあらゆる和紙のサンプル（実物の和紙）と解説で構成された和紙の図鑑ともいえるべきものです。いまだではもう入手不可能な和紙も多く、復刊は不可能！ この本自体、文化財と呼べる大作です。

同書は四代目耕平氏の叔父にあたる康敬氏が中心となり、全国の産地を訪ね歩いて完成にこぎつきました。このときに築いた全国の和紙産地とのネットワークはいまも森田和紙を支える財産になっています。



戦後のころの和紙の見本帳
うっすらみえる布袋さんがキュートです

色鮮やかな和紙製品が並ぶ倭紙の店。
「倭紙の店」の命名と揮毫は、なんと『広辞苑』で有名な^{しんむらいずる}新村 出 先生

時代とともに移り変わる需要

出版界の低迷とともに、高品質の和紙を書籍に使う機会が減り、いまでは社寺で記念に制作する豪華本や博物館でのレプリカ作成など、出版の需要は限られているそうです。同時に印刷技術の高度化があだとなり、和紙に印刷できる職人的技術をもった印刷会社が減ってきているとのこと。森田和紙ではいまなお和紙印刷に対応できる印刷会社との関係を大切にし、協力して時代にあった商品を生み出しています。

考えてみれば、最近ブームのご朱印帳、和菓子屋さんの掛け紙、箸袋、絵葉書などなど、身の回りには和紙製品がたくさんあります。さらに海外のアーティストも和紙ならではの風合いに注目しています。

和紙の魅力を伝えるために

驚いたのは現在流通している和紙の多くにはパルプが使われていて、^{さくら}椿・^{あまぎ}三桎・^{がら}雁皮といった自然原料一〇〇%の和紙は、高級品に限られているということ。本来の和紙は繊維が長く複雑に絡み合っているため丈夫。また、化学原料を使っていないので時間がたっても変色や劣化が少ないのも特徴です。

ただし、椿など原料が高騰している現在、和紙の魅力をより広く伝えるためにはパルプ和紙が必ずしも悪いとは言えない、と森田さん。森田和紙では商品の魅力だけでなく和紙の正しい知識もお客さんに伝えることを心掛けておられます。

やはり椿一〇〇%の手漉き紙は美しさも丈夫さも格別。時代が変わっても本来の和紙でないと代用が利かない商品も少なくありません。たとえば着物を包む文庫紙（たとう紙）には長い時間がたっても劣化せず、湿気をよく吸収する高級和紙が求められます。そのほか漆製品の下張りや文化財の修復などは当然、上質な和紙でなくてはつとまりません。一見、紙とは関係のなさそうな分野でも和紙が日本文化を支えているのです。

株式会社 森田和紙(倭紙の店)

京都市下京区東洞院通仏光寺上ル

☎ 075-341-0123

死と生の不思議な関係

樋口章信

過日、ノーマン・ワデル氏の『売茶翁の生涯 (Baisso, the Old Tea Seller: the Life and Zen Poetry in 18th Century Japan)』の翻訳本が思文閣出版から出た。この本の翻訳作業を終えて、売茶翁の生きざまを知り、生きていくその姿の意味深さについて考えた。それは当然、死にゆく姿の意味を考えることにもなる。生死という表現と同時に、死生という表現を使うことが、生と老と病と死から、苦悩する人間を見つめる佛教の核心を、逆にうまく浮かび上がらせることになると思う。

私が祖父を亡くしたのは二十歳を過ぎた頃だったが、父を亡くしたのは五十歳を越してである。私は今数え年で六十五歳となった。佛の加護か、母は九十一歳でまだ健在だ。還暦を五年過ぎた私は、生きるということよりも、死するということを想像するようになりつつある。生きることは「生を行ずる」、そして死ぬことは「死を行ずる」ことだと言い換えられないだろうか。件の売茶翁は、常に死を意識して生きていた。つまり「死を行じて」いたのである。禪者としてというよりも、佛教の極意において、売茶翁は「生きざまの名人」である。

禪佛教は、石霜和尚の言う「百尺竿頭にすべからく歩を進め、十方世界に全身を現すべし(無門関)」という教えを実践する。死を念頭に置いて生きることが禅修行の眼目であり、売茶翁もそうした死生の感覚を体得していたであろう。しかし、それにしても売茶翁の覚悟がすごいのである。翁は決して寺に落ち着くことなく、一生の間「非所有の精神」を実践した。六十歳を超えてからの無住処の生きざまが目を引き。それは複数の真の友人が翁の周辺にいたということでもある。売茶翁は貧困を楽しんだようにも見える。「貧」という状況のなかで「百尺竿頭にすべからく歩を進め」ていた。八十一歳になって、生活手段だった茶道具をすべて焼却している。馴染んだそれぞれの道具に名を付けて人格化し、謝念と共に、翁はそれらを炎中に投げ入れて茶毘に付した。僧侶は住職になりたがる。僧も欲を有する人間なので安定をはしがるのだろうか。だが、物質的執着から離れようと決心したはずの僧が、物質的安定をはしがるのはどうも矛盾だ。住職も妻帯して子供をつくり、普通に家庭生活を営むようになっていく。日本佛教は(全てではないものの)執着から離れるどころか、妻・子供

や財産、土地、地位といった執着対象に悩まされている。さて、どうする。江戸時代に生きた売茶翁はこの部分に根本的に踏み込んだ。

「正命食」と「邪命食」ということを、私は売茶翁から学んだ。

上述の『売茶翁の生涯』に『対客言志』のテキスト全文が入っている。そこで売茶翁は正命食と邪命食について語る。中心となる叙述の一つは「今時の輩を見ると、身は寺院に置いていながら、心がけは俗世のはこりの巷に走る者が、十中八九までいる」という部分である。これは享保二十年（一七三五）頃の話だ。今から二八一年前の様子を語っているものだが、何も今と変わらない。現今のように「末法相應の教えだから」と言っていたわけでもないから。佛教の八正道における「正命」とは「正しい生活」であるから、どのように生活しているかということにこそ、僧の本質が顕在化するのである。翁は自らの生きざまを「非僧、非道、また非儒」とも表現した。

「百尺竿頭にすべからく歩を進め、十方世界に全身を現す」ることがいかにようにして可能か。ヒントは売茶翁の生き方にある。それは「非所有の精神」を実践することだが、「死を念頭に置いて生きる」こともある。

死と生は別物ではなく「命の裏表」である。とりわけ戦後における西洋文献の浅い翻訳によってもたらされた「近代」の洗礼を受けて、日本では已事究明の伝統をおさなりにしてきた。戦前の日本人を美化するのではない。だが、利那に滅していく「生命のあわれ」を意識して生きる日本人があまり現代に見られないので

ある。真の豊かさとは、持ち家におけるゴージャスな食生活や、将来を安心させる金融資産を意味するのではなく、「もののあわれ」と共に、今を充実して生きることではないだろうか。

もう一つ、心の問題がある。すなわち「転生輪廻」である。多くの現代の佛僧は転生を信じていないのではないか。浅薄な合理主義を呼び込みがちな西洋的思想が佛僧にまで影響を及ぼし、「個人主義」「民主主義」「人権主義」とかを「粗い日本語のままに」信じ込ませている。

私は今まで、出来るなら「よく生きたい」と思ってきた。しかしよく生きることは、そう簡単ではない。組織というものは「活かすルール」ではなく、「殺すルール」をつくる場合がある。売茶翁を知ってから気が付いたのは、組織（寺もその一つ）への執着に悩むよりも、「執着の対象から離れる」ことで、生き生きとした自分が回復されうることである。いったん「殺すルール」をもつ組織から離れてみるのだ。生活が苦しくとも、深い死の底から物を見たり感じたりすれば、次第に人生観は変わってくる。よく生きるためにこそ、死を見つめるべきである。そうすれば、「たとえ殺されても、決して死ぬことのない自己」が現出するだろう。売茶翁という人はとても興味深い人物であった。死と生との不思議な関係を、売茶翁は私に教えてくれたのである。転生して今もお生きている翁を感じる。今後とも翁の精神世界により深く分け入りたいと思う。

（佛教大学非常勤講師）

▼25 ページに書籍案内を掲載

「誓願寺門前図屏風」を歩いてみると

西山剛にしやま つよし

京都の博物館に着任し六年が過ぎた。この間、いくつかの展覧会を担当し、さまざまな方々との関わりを得て、充実した仕事をさせていただいている。とりわけ昨年おこなった特別展「京を描く 洛中洛外図の時代」は国立歴史民俗博物館・小島道裕氏のご協力を得ながら、コンセプト、出品作品、展示叙述などを先輩や同僚と議論しながら構成し、心から楽しんで仕事ができたと思う。

この展覧会では、当館が所蔵する「誓願寺門前図屏風」にも光をあてるつもりでさまざまな角度から検証をおこなった。賑わいの絶えない寺町通りに所在する寺院の門前景観を捉えており、都市・京都を表象する重要な作品として位置付けることができると思ったからだ。

展覧会の開催にあたり、まず立命館大学アート・リサーチセンターにご協力を依頼した。当該研究機関では、以前から「デジタル風俗画研究」に取り組んでおり、その過程で作品の細部まで行き届いた観察ができる高精細デジタル画像を取得するシステムが構築されていた。この方法を用いて「誓願寺門前図屏風」のデジタル画像を取得し、展示室のタッチパネルで利用者に作品の細部

まで観察してもらおうと考えたのだ。

技術者の方々にカメラや照明、オペレーションを行うPCなど大掛かりなセットを博物館に持ち込んでいただき、縦16センチ、横166センチにわたる作品の分割撮影を実施し、たつぷり一日をかけて八億画素に及ぶ高精細画像を取得した。この高精細画像の閲覧システムを搭載したタッチパネルを、実物作品が入ったケースの隣に設置し、展覧会を開幕させた。実物の作品を鑑賞したあと、タッチパネルを利用して細部を確認し、また実物に戻っていく、というような鑑賞スタイルも提案したつもりである。

「誓願寺門前図屏風」は、経年劣化が進み、また部分的に汚損が甚だしい。実物作品のみの展示であつたら、行き届いた観察を促すことはできない。実物作品が持つネガティブな要素を高精細デジタル画像は十分に補ってくれたと考える。それを物語るように展示期間中、ケースの前には常に賑わいがあつた。実物とデジタルの相互補完的な展示は、この種の展示においてはたいへん効果的であると、身をもって知ることができた。

しかし、やはり誓願寺は京都にある。誓願寺は建立以来、都市

に生きる人々の信仰を集めた名刹^{めいさつ}であり、しかも私が勤務する博物館からは歩いて数分程度だ。それならばやはり現地にいき、実際の誓願寺と絵画のイメージを比較してみることこそ醍醐味ではなからうか。そう考えて、展覧会準備期間中には、数回にわたって現地を訪れ、ぐるぐると周囲を踏査してみた。

その中で、特に気にかかるものがあつた。誓願寺門前にある「迷子みちしるへ」という石標がそれだ。明治十五年（一八八二）に建てられたこの石標は、道に迷った子と親が再会の目印とするもので、近代に入り行政の肝いりで屈指の繁華街となった新京極の象徴ともいえる。これまで、あまり注目してこなかったが、門の左側にどつしりと立ち続ける姿は今でもなお存在感を示している。

実はこの石標は、物をなくした場合にも効力を發揮する。四角柱の石標の向かって左側に探している物品の名前を記しておく、向かって右側にはそれに関する情報が提供されることとなっている。

ふと思ひ立ち、左側の面を覗いてみた。そこには驚いたことに今でも探し物の名前がいくつも貼られていた。どこかで落としてしまったのであろうPHSや思ひ出が詰まった文房具、さらには結婚指輪のような、失くしたら洒落にならないようなものが付箋などに記され、貼られている。現代に至ってもなお、誓願寺門前にある石標の機能は忘れ去られることなく、人々の心に根ざしているのだ。

道に迷った子供とその親、あるいは失せ物の発見、これらはいずれも一度切れてしまった縁を再び繋ぎあわせることを意味しており、誓願寺は、縁の再接続の場^ばとしていまなお機能しているのである。

調べてみると、この習俗（あるいは信仰）は、室町時代後期頃から流布される誓願寺の縁起と関わりがある。すなわち、誓願寺本尊の阿弥陀如来坐像は、賢問子^{けんもんこ}・芥子国^{かいしこく}という親子が合作をすることで建立されており、親子の絆が信仰の中核である本尊を生み出したという説である。この言説を基礎としながら、近世に入ると、生き別れになった母子が誓願寺の施餓鬼会^{せがくわい}の際に再び巡りあう人情話も成立してくる。誓願寺の語りには、決まって「再会」「再接続」というテーマが立ち現れるのだ。

豊臣秀吉による寺地移転、明治初頭の境内の削減など、順風満帆な歴史を歩んでいるとはいいたい誓願寺であるが、都市民と結びあうささやかな信仰の中には、何百年にもわたる大いなる歴史が生きている。そのことを気づかせてくれた出来事だった。

（京都府京都文化博物館学芸員）

京都府京都文化博物館・京都市歴史資料館 企画 京都 実相院門跡

B5判・一四四頁・本体二、〇〇〇円

お金のリアリティ

『日本近世貨幣史の研究』によってようやく貨幣史の考え方の枠組みをまとめることができたが、書き終えてもなお貨幣は難しい存在である。近世においてはその種類が多く、素材・単位・流通域あるいは使用の場面も異にした多様性に特徴があった。近代になって統一された円貨も、近ごろでは各種のカードや電子マネー、さらには情報数珠^{じゆず}つなぎのビットコインまで出現すると、その「実体」すら疑わしい。

形態だけの問題ではない。私たちの日ごろの生活に不可欠なお金でありながら、ゼニ・カネの話は表現を誤れば品格を損なうことにもなるし、貨幣や通貨の経済学という近寄りがたい気がする。きれいなお金の遣い方もあれば、汚いお金の洗浄の仕方（マネー・ローンダリング）まである。道徳観まで含めて考えると、お金についての認識はかなり高次に属するものであり、時代とともに変化してきたことは想像できるが、自らの記憶をたどってもどのように獲得してきたのか判然としない。

はたして子どもの発達のなかに歴史の痕跡は見出されるのだろうか。そんな思いで、子どもたちがどのようにお金を認識してい

やす
くに
りよう
いち
安 国 良 一

くのか少し勉強したことがある。参照したのは、H・G・ファース『ピアジェ理論と子どもの世界——子どもが理解する大人の社会——』（加藤泰彦・北川歳昭編訳、北大路書房、一九八八年）である。南イングランドの約二〇〇名の子どもたち（日本の小学生にあたる年齢）からの聞き取りを通して、お金とその概念の形成や社会の仕組みについての理解の発達段階を観察している。ピアジェ理論とは、著名なスイスの児童心理学者ジャン・ピアジェ（一八九六—一九八〇）による知的発達の理論で、あらゆる行動の根底には認知的な構造と機能があり、それが主体・客体の能動的な相互作用によって構成されていくことを説いたものである。ファースの研究は、主な対象が物理的領域にとどまるピアジェ理論を、子どもの社会認識まで広げたことに意義がある。

専門的な発達段階のことについては全くの門外漢だが、お金が、家族を超えた外部の社会を子供たちが理解していく際の一つのモノであることは疑いないだろう。しかも、お店での売り買いから始まって、お金の出どころや利益という考え方、さらに財と（公共）サービスの区分、お金の供給者としての国や役所の役割

など、身近な経験的世界から、子供たちにとっては未知のマクロな経済の世界にまで（正確ではないにしろ）認識は広がっていく。

ファースの著書には、チップと給料の区別が、ある年齢までつきがたいという指摘があった。お金の授受ということでは同じ事象ながら、TPOが違うのである。チップの慣行は日本では育たなかったが、お駄賃や御為^{おため}の名目で少額の遣り取りがおこなわれる場面が思い起こされる。子どもたちは（たとえ大人になっても）人間関係の機微をこうした場面から学び、次代へ引きついできたのである。それはリアルなお金を通してであって、けつして振込や電子マネーで贈られたチップやお祝いではなかっただろう。日本には、イギリスの子どもたちには経験のないリアルな「お年玉」もある。大げさかもしれないが、実体と社会的意味が結びついたお金のリアリティが歴史と文化を支えてきたと言えないだろうか。

社会的性差を指す「ジェンダー」は、歴史や文化を背景にもつ言葉として定着してきた。同様の歴史性・文化性を含んだ言葉として、筆者は「お金」の語を気に入っている。客観的で冷めた「貨幣」ではなく、卑近な「ゼニ・カネ」でもなく、現在の価値観をなんとなく反映した温かみを内包している日本語のように思う。こうした観念が実体の変化とともに将来続く保障はないが、今少しお金のリアリティにこだわってお付き合いしてみたい。できれば仲良く……。

（住友史料館副館長）

日本近世貨幣史の研究 安国良一著

近世貨幣はどのように生まれ、流通し、終焉をむかえたのか。

日本の歴史上、近世ほど多種類の貨幣が流通した時代はない。金銀・銭という幕府制定の「三貨」、近世初頭の大名領国にみられる金銀貨・銅貨、藩札や私札の紙幣などを加えればその数は膨大である。さらに銭については、地域独特の数え方もあった。こうした複雑さの一方、近世の権力は貨幣制度を確立したとも認識されている。本書は、この一見矛盾する貨幣の特質を明らかにすることを試みる。一国「通貨」という貨幣観を解きほぐし、その独自の機能や意味づけを問いなおす良著。

序章	課題と方法
第一章	第一部 貨幣の統合と多様性
第二章	三貨制度の成立
第三章	貨幣の地域性と近世的統合
第四章	地域からみた近世中後期の通貨事情（一）播磨を中心に
第五章	第二章 貨幣の機能
第六章	金銀貨の機能とその展開
第七章	貨幣改鑄と新旧貨引替機構
第八章	近世初期の撰銭令と銭貨の機能
第九章	貨幣の社会的・文化的効用
第十章	第三部 寛永通宝の鑄造と流通
第十一章	寛永通宝の第一次鑄造
第十二章	寛永期の大坂銭座
終章	享保期、大坂難波銭座の鑄銭 まともと展望 真鍮四文銭の鑄造と流通

やすくに・りょういち：一九五三年生。京都大学博士（文学）。現在、住友史料館副館長

【6月刊行】

▼A5判・三二〇頁／本体六、八〇〇円

台湾の東洋美術専門書店から

民谷伊左子

台湾台北市の片隅で小さな東洋美術の専門書店を営んで早二〇余年。先ごろの熱狂的な台湾總統選挙の結果に安堵していた。もちろん台湾の将来を左右する重要な選挙だったし、今までの滅茶苦茶な八年間から漸く脱却できるなどの大きな理由もあるが、本屋の身としては「予算が下りるぞ！」も大きな関心事。

そう、日本と違いここでは「政治」が学術や文化予算に大きな影響を及ぼすのだ。例えば故宮博物院は文化団体ではなく政治団体。院長は總統によって直接任命され、与党が中国寄りならばそれに従える人選となる傾向。表向きは「色々やってるんですよ」的に体裁を繕って中華文化以外の特別展などもやるけれど、大学や研究機関、図書館などから発注される本の種類があらさまに変わってくる。

文化予算には限りがあるので、どの大学でも教授達はなんとか公費で欲しい本を入手しようと経費の争奪戦が繰り広げられるのだが、中国寄りの政権になると中華関連以外の書籍リクエストが通ることがグッと減少。ちよっとえげつないぐらいい。日本美術関連の本もウリのうちとしては「中国の○○」というタイト

ルばかりを納品箱に詰めるのはちよっとウンザリ。「日本美術もなかなか面白いですよ、旦那！」とばかりに店の目立つ所に関連書籍を配置してせめてもの抵抗を試みる。

アジア一の親日国イメージが強い台湾はもちろん概ね親日ではあるけれど、「知日」の部分に今一つ？な部分が多い。

五〇年間日本の植民地として日本語による日本人としての教育が行き渡り、多くのインテリが多数日本本土に学びに行つたため、あの時代は確かに知日であったし、むしろほぼ日本だった（ちよっと遠距離の）。台湾語（中国語ではなく）の中にも「おじさん、おばさん」「運ちゃん」「弁当」などの言葉が、外来語としてではなく台湾語の単語として残り、今も普通に使われている。母国語として日本語を話す老人も多いことは日本でも良く知られているところだろう。

その後の長い、ほぼ鎖国のような中華一辺倒の洗脳と弾圧の暗黒の時代を経てもなお脈々と「日本」というものが生き残り、美しき誤解が強調された日本イメージが作られていった。そして二〇年ほど前の李登輝總統時代に鎖国のドアが開かれ「日本なう」

が一気にドバドバとなだれ込み大洪水。ありとあらゆる分野に日本文化が入り込み、日常生活にごく普通に「日本」が存在している。特に社会の担い手の中心である中高年層は、家では親世代のノスタルジックな日本昔話を聞かされ、外では恐怖政治下で自身の台湾アイデンティティーを否定され続け、自分が何者かがあやふやなまま再度押し寄せてきた日本文化の波を浴びている。自分の文化や歴史は封鎖されちゃんとした理解がないまま、先に圧倒的な質と量でやってきた「日本文化」。

こんな複雑な状況下では、他国の日本研究のように純粋な学問として、異文化に対する健全な興味の対象として、外交相手としての戦略的な目標として日本を捉え研究していくのは、なかなか難しいだろう。

「自分は台湾人である」という立ち位置に自然体で立つようになった若い世代はずいぶん違ってきており、「外国」として日本を捉えてはいるが、あまりにも普遍的に食い込む日本文化が加えて日本を「知ったような氣」にさせている面がある。日本の新しいものは常にリアルタイムで周囲にある。日本の雑誌もコンビニで買えるし、翻訳版だつてすぐに出る。ただただあまりに普通で日常すぎるのだ。自分たちが一番日本を理解しているという思い込みが、もう一步踏み込んだ日本研究を妨げている気がする。彼らの思う日本文化の多くが既に台湾風味に味付けされたものだというところに気づきにくい。ありのままの姿を、裏側にひっそり息づく光と影を、好奇心と興味と時に嫌悪感なども感じなが

らでも掘り下げていく姿勢は、もしかしたら他国よりもずっと少ないのではないか、とも感じる。

まあ、日本も、屋台が面白い、とか、ほっとする国、親目的な等の相変わらずの切り口でしか台湾を見ていないことが多いのでお互いさまなのだが。

ここは一つ知ったかぶりはひっこめて、もう一度フレッシュな気持ちで互いの文化を見つめ直す時期なのではないだろうか。

美しき過去の亡霊にも、ダダ流しになっている安いサブカル的なものにも、訳の分からない思い込みにも左右されず、独自の台湾人目線で掘り下げられていく日本を、その日本研究をもっと色々見てみたい。

「ほー、こう来たか」と思える日本研究、台湾研究の本は、私がいそいそと平置きで一番目立つ所に配置するのでお任せあれ！

（汗牛書店〈東洋美術書籍専門店⑤台北〉副総経理）

【汗牛書店】台湾台北市にある、台湾・香港・大陸・欧米からの中国美術を中心とする、東洋美術書籍の専門書店。

入門書から研究書、美術館・博物館の図録、美術雑誌まで約四〇〇〇タイトルを常備。
店名は「汗牛充棟」から。

史料

探訪

(64)

千里ニュータウンとバスオール

五月女賢司
（吹田市立博物館 学芸員）

吹田市岸部北の紫金山公園内に所在する吹田市立博物館は、平成四年（一九九二）に地域歴史博物館として開館した。常設展示室では、吹田の考古・歴史・民俗・美術工芸などを古代から近代にいたるまで、資料・模型・ビデオガイド等により展示している。また、古代窯業遺跡を実物大スケールで再現している。近年では、千里ニュータウンの現代生活資料や仏像の複製などをロビーで常設展示しており、実際に手で触れることができる。さらに、年間五〜六回程度の特別展や企画展も開催している。

紫金山公園には初期平安宮造営における瓦の供給窯であった国史跡「吉志部瓦窯跡」があり、里山の自然とともに歴史探索を楽しめる。また、「吉志部瓦窯跡」の北東二〇〇メートルには聖武朝（後期）難波宮の内裏およびその周辺部で数多く検出された瓦の生産工場だった国史跡「七尾瓦窯跡」もある。

近年では、当館を舞台にした市民活動が活発になってきており、平成一八年（二〇〇六）には「千里ニュータウン展——ひと・まち・くらし——」が市民参画のもとに企画・開催され、好評を博した。以降、特に現代史や自然史関連の展覧会については、市

民参画型の企画として実施されることが多くなったほか、ニュータウンや万博の市民研究家やニュータウンの住民との結びつきが深くなり、そうしたつながりから、次の展覧会企画が生まれたりするなど、さまざまな展開を生んでいる。

さて、今回のテーマの千里ニュータウンとバスオールであるが、これらも当館の市民参画型展示づくりと深い関係がある。平成一六年（二〇〇四）に小山修三氏が当館の第二代館長に就任して以降、市民参画の展示づくりやさわる展示の大幅更新を打ち出した。その第一弾が、当館による初めての市民参画型展示である前述の「千里ニュータウン展」であった。平成一七年（二〇〇五）から市民による実行委員会を組織し、市民主体の話し合いによる企画を進めた。そうした話し合いのなかで、「当時、千里ニュータウンへの引越しの際には、ミゼットという三輪自動車を使用したのが、途中でエンストして大変だった」といった話や、「府営団地には一九七〇年代の「一部屋増築」（住民による生活の質改善運動）を契機に風呂が設置されるまで風呂がなく、大阪府からは近隣センターの公衆浴場に行くよう指導されていたが、こ

れが気持ちよく入ることができる風呂ではなかったもので、バス
オールなる独立型の風呂を購入して、台所やベランダに置いて
使ったものである。府営団地のベランダには、外から見るとバス
オールが並んでいた」などの話が、ある実行委員から出ると、で
はミゼットとバスオールを探し出して展示しよう、となったので
ある。バスオール探しには苦労したようであるが、実際に探し出
して、展示することができた。結局、バスオールについては、一
台の寄託、二台の寄贈をいただいて、現在当館に常設展示している。



バスオール

左から、1963年販売開始（エア・ウォーター（株）蔵）／
1965年頃販売開始（当館蔵）／ 1967年販売開始（当館蔵）

では、そもそも千里ニュータウンとはどういった存在で、バス
オールとは何なのか。

昭和三〇年代に日本経済が急成長を遂げる時期、都市部への人
口集中が起きる。大阪府下においても例外ではなく、増え続け
る人口に対する住宅問題が重要な課題の一つとなっていた。千
里ニュータウンは、こうした住宅問題を解決し、健康で文化的な
生活を享受できる新しい住宅都市を建設するという目的で建設
された、日本で初めての大規模ニュータウンで、地域的には吹田
市と豊中市にまたがる。開発主体は大阪府企業局、開発面積は約
一一六〇ヘクタールであった。クラレンス・ペリーの近隣住区論
に基づき、各住区に小学校、近隣センター、保健・診療施設、レ
クリエーション施設などを計画的に配置し、歩車分離を徹底する
など、当時としては斬新な近代的都市をめざした。昭和三七年
（一九六二）九月の初人居から五〇年を超え、住民の年齢構成の
変化、住宅の建て替え、商業施設の衰退と再生など、さまざまな
現象が起きている。

次にバスオールについて紹介する。写真左の風呂は、のちに
「ほくさんバスオール」と呼ばれることになるシリーズ最初期の
型で、「ほくさんスタンウエルバス」という製品名で昭和三八年
（一九六三）一二月にまず北海道で発売開始された。これは、水
戸の発明家であるヤエス化工の社長・立井宗久氏が、この製品を
同年五月に東京国際見本市に出品する際に「立井」の名をとって
「立はスタンド、井はウエル」から「スタンウエルバス」と名付

けたものである。昭和三十九年（一九六四）九月にオープンしたホテルニューオータニに装備された東洋陶器（現・TOTO）のユニットバスとあわせ、日本におけるユニットバスの先駆けの一つである。先の住民の発言のとおり、千里ニュータウン開発当初、府営団地約一万戸には浴室が設置されず、近隣センターに公衆浴場がつくられた。そのため、府営団地の住民の間で大ヒットし、多くは台所やベランダに置かれた。ガス湯沸かし器、シャワー、浴槽などがセットになっており、価格は当時の給料一か月分を目安に設定されたという。「まず浴槽に湯を入れ、頑丈なフタに乗って体を洗い、フタを外して浴槽に浸かるようになっていく」と、多くの住民は当時の思い出を語るが、フタには「フタの上には乗らないでください」との注意書きがある。

写真右の「ほくさんバスオール」は、昭和四二年（一九六七）発売開始の製品で、洗い場がついた大型タイプである。「ほくさんバスオール」は、昭和三八年（一九六三）の発売開始から、昭和五三年（一九七八）に始まった府営住宅の一部屋増築（浴室が設置された）が完了するまで、二〇年前後にわたって使われたケースもあった。なかには、洗い場がないバスオールから洗い場つきのバスオールに買い替えた家もあった。

市民参画型展示の実行委員の記憶が展示となって来館者と共有され、三台並んだ常設化につながり、さらに多くの人々に新たな記憶や知識が共有されることとなる。記憶や知識の新たな紡ぎ方として、これからも大切にしていきたい。

— MEMO —

吹田市立博物館

考古、歴史、民俗、美術工芸などの資料を中心に展示。また、特別展も開催。隣接する紫金山公園には国史跡「吉志部瓦窯跡」があり、里山の自然と歴史探索を楽しめる。

- ・ 住 所 〒564 0001 大阪府吹田市岸部北4丁目10-1
- TEL 06-63338155 FAX 06-63338198
- ・ アクセス JR「岸辺駅」より徒歩20分
- ・ 開館時間 総合展示 午前9時30分～午後5時15分
月曜日、
- ・ 休館日 祝日の翌日（祝日が月曜日の場合、火曜日も休館）
12月29日～1月3日
- ・ ホームページ <http://www.bumpaku.or.jp/>

平成28年度秋季特別展

「古代の港か？ 祭場か？」
——五反島遺跡の謎に迫る——

・ 会 期 10月8日（土）～12月4日（日）

書評・紹介一覧 6～9月掲載分		※(評)…書評 (紹)…紹介 (記)…記事〔敬称略〕
おもてなしとマナー	(記)『清流』10 (紹)『味の手帖』49巻9号	西山地藏院文書 (紹)『史学雑誌』125編6号 大航海時代の日本と金属交易
園城寺の仏像	(紹)「中外日報」5/27	(評)『社会経済史学』82巻1号(櫻木晋一) 中国南北朝隋唐陶俑の研究
花道の思想	(紹)「中外日報」7/22	(評)『古代文化』68巻1号(市元壘) 鎮守の森の物語
記念植樹と日本近代	(紹)「毎日新聞」6/26 (紹)「山林」8月号 (紹)「アーカイブス通信」No.17(みどりの図書館)	(紹)「毎日新聞」6/26 天下人の神格化と天皇 (評)『ヒストリア』256号(石津裕之) (評)『日本歴史』817号(田中暁龍)
京都 実相院門跡	(紹)『リポート笠間』No.60	動物・植物写真と日本近代絵画 (記)「日本経済新聞」8/14
近世の王権と仏教	(評)『日本歴史』820号(野村玄)	日本中世の環境と村落 (評)『歴史評論』795号(蔵持重裕) (紹)『地方史研究』382号
近世日本の銅と大坂銅商人	(紹)『日本史研究』645号	売茶翁の生涯 (紹)「茶華道ニュース」8/1 (紹)「佐賀新聞」8/21(川本喜美子)
近代の「美術」と茶の湯	(記)「日本経済新聞」5/1	平安王朝の葬送 (紹)「中外日報」7/8 (紹)「週刊読書人」7/22
近代日本の都市社会政策とマイノリティ	(評)『大原社会問題研究所雑誌』694号(中嶋久人) (評)『民衆史研究』91号(藤田貴士)	変容する聖地 伊勢 (紹)「朝日新聞」6/18 (評)「読売新聞」7/3(月本昭男) (紹)「世界日報」8/28 (紹)「中外日報」8/26
熊倉功夫著作集	(紹)「茶華道ニュース」8/15	万国博覧会と人間の歴史 (記)「読売新聞」7/10
正倉院の香薬	(紹)『リポート笠間』No.60	和食とは何か (紹)『茶の湯』508号
正倉院染織品の研究	(評)『日本考古学』41号(東村純子)	
正倉院宝物と古代の技	(紹)『家具道具室内史』8号 (評)『日本歴史』820号(稲田奈津子)	

7月から9月にかけて刊行した図書

図 書 名	著 者 名	ISBN978-4-7842	本体価格	発行月
日本中世の政治権力と仏教〔オンデマンド版〕	湯之上隆著	7018-7 C3021	8,800	7
中世寺社信仰の場〔オンデマンド版〕	黒田龍二著	7017-0 C3021	7,800	7
近世寺社参詣の研究〔オンデマンド版〕	原淳一郎著	7013-2 C3021	8,300	7
売茶翁の生涯	ノーマン・ワデル著	1845-5 C1023	3,500	7
幕末外交儀礼の研究	佐野真由子著	1850-9 C3021	5,000	7
墨と響きあう	町田泰宣著	1851-6 C0071	3,000	8
箏篋の研究	中安真理著	1849-3 C3070	6,000	8
デンマーク人牧師がみた日本	長島要一訳・編注	1860-8 C1021	3,700	8

7月から9月にかけて刊行した継続図書 (*は予定)

シ リ ーズ 名	配本回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	本体価格	発行月
熊倉功夫著作集	1	1	茶の湯 心とかたち	1852-3 C3321	7,000	7
東寺百合文書	12	12	り函一	1862-2 C3321	11,500	9
和食文化ブックレット	4	4	和食と健康	1861-5 C1077	900	9
熊倉功夫著作集	2	2	茶の湯と茶人の歴史	1853-0 C3321	7,000	9*

(表示価格は税別)

◆『鴨東通信』 刊期変更のお知らせ ◆

これまで年4回(4・7・9・12月) 刊行しておりましたが、諸般の事情により、年2回(4・9月) 刊行に変更させていただきます。今後も誌面の充実に努めますので、引き続きご愛顧賜りますようお願いいたします。

営業部より

☆学会出店情報 小社刊行圖書を展示販売

※出店学会、出店日は変更の可能性有
日本史研究会(立命館大学) 10/8(土) 10/9(日)

美学大会全国大会(同志社大学) 10/8(土) 10/9(日)

中古文学会(大阪大学) 10/22(土) 10/23(日)

日本思想史学会(関西大学) 10/29(土) 10/30(日)

東方学会(京都市国際交流会館) 11/5(土) 11/12(土) 11/13(日)

史学会(東京大学) 11/12(土) 11/13(日)

人文地理学会(京都大学) 11/12(土) 11/13(日)

儀礼文化学会(松尾大社) 12/3(土)

仏教史学会(大谷大学) 12/3(土)

編集後記

- ▼園城寺の仏像、今回お話をきいて俄然黄不動さんが気になっていました。鎌倉彫刻の立体感、躍動感、そして筋肉。四巻に掲載予定、乞うご期待。(m)
- ▼研究会で三島に訪れる機会があり、いきおい名物の鰻! と早速食べて大社に参拝。でも実は鰻食は地元ではタブーだそうです……ぞつ。(大)
- ▼森田さんの「和紙は日本文化を支えている」というお話しが印象的でした。和紙の世界に触れたい方はぜひ倭紙の店へ! (M)
- ▼体力が有り余る二歳児を消耗させるため毎日鴨川沿いを歩いています。延々歩いても息子は元気いっぱい。消耗するのは親だけ。(理)
- ▼健康のためなら死んでもいいほどの健康オタクを任じ、心身の改造を日々夢想しております。行方は難し。『和食と健康』で実践だ。(h)
- ▼大学訪問のおり、やけに学生さんが眩しく見え、ついつい際を歩いていることに気がつきました。「堂々」と言い聞かせております。(江)
- ▼リオ五輪 粘り強さや逆転勝利に感動しました。最期まで諦めない心は大事ですね。(き)
- ▼「シン・ゴジラ」最近の邦画の中では個人的に一番。震災後だからその映画です。(一)
- ▼表紙図版・服部英翁『生花伝書』所収図(『利休の茶の花』より)

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年2回(4・9月) 刊行します。

代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

おうとうしゅん

鴨東通信 四季報 No.103

2016(平成28)年9月29日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-533-6860

fax 075-531-0009

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン 鷺草デザイン事務所

〔近刊予告〕

藤原道長事典

御堂関白記からみる貴族社会

大津透・池田尚隆 共編

◎『御堂関白記全註釈』（全十六冊下記参照）の成果をふまえて、約一〇五〇項目を新たに書きおろし、十一の大分類に整理
◎ユネスコ記憶遺産『御堂関白記（陽明文庫蔵）』を通して、最新の研究成果にもとづいた新たな平安朝の貴族社会像を提示する

藤原道長のめざしたものの
文学作品に描かれた道長

大津透
池田尚隆

※（ ）内は項目執筆者

予 定 内 容

政務・儀礼
官職・官司
道長をめぐる人びと
〔植村真知子・木村由美子・倉本一宏・中村康夫・福長進・吉田小百合〕
邸宅・地名
松野 彩〔吉田幹生〕
神事・神社
武井紀子〔丸山裕美子〕
仏事・寺院
松岡智之〔藤本勝義〕
風俗・信仰
中島和歌子
学問・芸
吉田幹生〔佐藤信一・妹尾好信・塚原明弘〕
衣 食 住
近藤好和〔松野彩〕
丸山裕美子
病と医療
倉本一宏〔池田尚隆〕
御堂関白記の表現
藤原道長年表／系図／付図／索引

おおつ・とおる…東京大学大学院人文社会系研究科教授
いけだ・なおたか…山梨大学大学院教育学研究科教授

▼A5判・約四二〇頁／本体六、〇〇〇円

御堂関白記全註釈

山中裕編

〔全16冊〕

一級の日記史料『御堂関白記』の原文・読み下しと詳細な註により構成。永年にわたる講読会（東京・京都）と夏期の集中講座による成果。

〔内容〕御堂関白抄／長徳四年・長保二年・寛弘元年・寛弘二年・寛弘三年・寛弘四年・寛弘五年・寛弘六年・寛弘七年・寛弘八年・長和元年・長和二年・長和四年・長和五年・寛仁元年・寛仁二年上・寛仁二年下・治安元年
▼A5判／揃本体一〇七、〇〇〇円

平安王朝の葬送 死・入棺・埋骨

籀谷寿著

平安王朝の死、入棺、葬送、埋骨の様相を通覧することから、皇権の在り方を考える。平安朝史研究にながくたずさわり、精通した著者によるこころみの一書。
▼四六判・三〇四頁／本体三、七〇〇円

日記・古記録の世界

倉本一宏編

国際日本文化研究センターでの3年間にわたる共同研究『日記の総合的研究』の成果。
▼A5判・七九二頁／本体二二、五〇〇円

東寺百合文書第十二巻

り函一

〔9月刊行〕

京都府立総合資料館編

東寺百合文書とは、東寺に襲蔵されてきた、総数一万八千点・二万七千通におよぶ日本最大の古文書群である（二〇一五年ユネスコ世界記憶遺産に登録）。本史料集には「ひらかなな部」刊行中の『大日本古文書』未収録の「カタカナの部」を翻刻。
2年ぶり待望の第12巻。

▼A5判・四五二頁／本体一一、五〇〇円

秘仏も含め、貴重な仏像を網羅的に収録し、360度多方面からのカットを大型のカラー図版で掲載

園城寺の仏像〔全4巻〕

天台寺門宗教文化資料集成
仏教美術・文化財編

― 待望の平安彫刻篇いよいよ刊行開始! ―

第二巻 平安彫刻篇Ⅰ

【10月刊行予定】

▼A4判・オールカラー一八〇頁／本体一八、〇〇〇円

収録像・内容

秘仏 重要文化財 如意輪観音坐像（観音堂安置）
重要文化財 護法善神立像（護法善神堂安置）
重要文化財 十一面観音立像（尾蔵寺伝来）
重要文化財 千手観音立像（如意寺伝来）
重要文化財 木造不動明王坐像（勸学院伝来）
ほか 計13像

総論一 井上一稔（同志社大学教授）
総論二・調書 寺島典人（天津市歴史博物館）



重要文化財 千手観音立像
（如意寺伝来）

【既刊 好評発売中】

第一巻 智証大師篇

▼A4判・オールカラー一七〇頁／本体二一、〇〇〇円

【続刊予定】

第三巻 平安彫刻篇Ⅱ

【二〇一七年三月刊行予定】

▼A4判・オールカラー一六〇～二〇〇頁

予定価格一八、〇〇〇～二〇、〇〇〇円

収録像

秘仏 国宝 新羅明神坐像（新羅善神堂安置）
重要文化財 愛染明王坐像（観音堂安置）
大日如来坐像（唐院伝来・金堂安置）
不動明王二童子像（普賢堂安置）
不動明王立像（観音堂安置）
天津市指定文化財 千手観音立像（近松寺伝来）
ほか

第四巻 鎌倉桃山彫刻篇

【二〇一七年九月刊行予定】

▼A4判・オールカラー一六〇～二〇〇頁

予定価格一八、〇〇〇～二〇、〇〇〇円

収録像

秘仏 重要文化財 金色不動明王立像
重要文化財 吉祥天立像
重要文化財 訶梨帝母倚像
ほか

利休の茶の花

桑原宗典著

【10月刊行予定】

茶席になくはならない茶花。茶聖と呼ばれる千利休のいけた花とは、どのような花だったのか――

現代では別ものとして語られる「いけばな」と「茶花」。その成立過程をさかのぼることで、両者の根源にある共通性を明らかにし、利休が茶花に込めた思想を探る。

また、初代池坊専好と利休の交流を、それぞれの花に関する史料を比較することで描き出し、利休の花の成立背景を考察する。

■目次■

第一章 生花の成立過程

一、池坊における生花の登場とその歴史的背景―池坊専好から二代専好まで

二、伝書および同時代の記録からの検討

三、立花に対する生花の地位の確立

第二章 利休の茶の花 利休の花に関する記録より

一、利休の花に関する諸記録からの検討

二、池坊の生花と利休の茶の花の思想の共通性

第三章 利休と初代専好の関係

一、「古哲生花四箇伝」からの検討

二、服部英翁『生花伝書』との比較

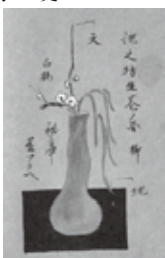
三、「齡花集覽」と『生花伝書（服部）』によって証し得ること

第四章 利休と専攻にまつわる逸話

一、茶席の花―『江岑夏書』『江岑咄之覚』『逢源齋書』より

二、利休の人物像―『茶話指月集』より

三、利休と初代専好の通い合う心



評書
集
ネッポ
募
詳細は31頁

▼A5判・二〇二頁／本体三、七〇〇円

くわはら・そうてん：一九六八年生。宝塚造形芸術大学大学院博士課程修了、博士（芸術学）。茶道裏千家教授。

売茶翁の生涯

ノーマン・ワデル著 樋口章信訳

日経新聞読書面で紹介！

「僧職にありながら自活するのは戒律に反したが、僧の中には貪りの心を持つ者もいる。それよりは茶を売って暮らす方がよいと喝破し生きてきた（中略）米国生まれ、日本在住の文学博士が、墨蹟や書簡をもとに、禅僧の人生と思想を丹念に描き出す」

佐賀新聞はじめ各紙誌、

ブログ・ツイッターで話題沸騰！

「なんだ、このオッサンは?! 喫茶店のマスターにして伊藤若冲のマブダチ」

プロローグ

第一章 肥前時代

第二章 京都へ

第三章 東山で茶を売る

第四章 肥前に戻る

第五章 在家居士として

第六章 最後の十年

第七章 最晩年

エピローグ 地方の有力な支持者たち

付録 廬同「茶歌」



▼A5判・二五六頁／本体三、五〇〇円

ノーマン・ワデル：大谷大学名誉教授

江戸教育思想史研究

前田勉著

【10月刊行予定】

エリート教育か、藩士全体の教養の底上げか――。

教師による講釈か、自由闊達な議論を認める集団読書(会説)か――。

学問が出世に結びつかない身分制社会の近世日本において、ようやくつくりだされた学校はさまざまに展開する可能性があった。学ぶ理由が明確でないなかで、学校はいかに生まれ、人々はそれになにを求めたのか。学習の方法、教育の目的に注目すること、官学／私塾、儒学／国学／蘭学といった枠組みを超え、一七世紀から明治初期までを見通し、江戸教育思想史に新たな地平を拓く。

序章 江戸教育思想史序説

第一編 学校構想と家訓

林家三代の学問・教育論／江戸前期の学校構想／山鹿素行における士道論の展開／貝原益軒における学問と家業

第二編 儒学の学習法と教育・教化

太宰春台の学問と会説／一八世紀の文人社会と学校／細井平洲における教育と政治／寛政正学派の「中庸」注釈

第三編 国学と蘭学の学習法と教育・教化

一八世紀日本の新思潮／江戸派国学と平田篤胤／平田篤胤の講釈

第四編 私塾と藩校

広瀬淡窓における学校と社会／吉田松陰における読書と政治／長州藩明倫館の藩校教育の展開／加賀藩明倫堂の学制改革／明治前期の「学制」と会説

終章

▼A5判・五九〇頁／本体九、五〇〇円

まあだ・つとむ：一九五六年生まれ。現在、愛知教育大学教授。

江戸後期儒者のフイロロギ―

竹村英二著

原典批判の諸相とその国際比較

江戸時代後期／幕末の日本では高度な考証的学問が発展した。それを担ったのは「市井」の儒者たち。彼らは、客観性と実証性を備え、既成思想に束縛されない学究活動を展開していた。日本における実証的学問の成立は清朝考証学と近代の西洋体験を基盤とする――、こうした所論は本書をもって再考を余儀なくされる！

▼A5判・二五六頁／本体五、五〇〇円

会沢正志斎書簡集

大阪大学会沢正志斎書簡研究会編

大阪大学大学院文学研究科が所蔵する会沢正志斎書簡を活字翻刻。会沢が、弟子で甥でもある寺門政次郎およびその父喜太平に対して宛てた書簡を主とし、また、会沢著作の書肆とのやりとりに関する記述が多く存在するものも特徴。緊迫する幕末の情勢と、そのなかで行われた思想の営為を解明するための一級史料。

▼A5判・三四八頁／本体一、五〇〇円

知の伝達メディアの歴史研究

辻本雅史編

教育史像の再構築

「学校困難」の21世紀、教育はどこに向かうのか。「教育」を「知の伝達」ととらえなおし、その伝達のための媒体を「メディア」と規定することで、これまでのような、学校を中心とした教育史像ではなく、学校を含みながらも、学校を越えたところで見られる人間形成の営みを、全体としてとらえなおす視点を提示する。

▼A5判・三〇〇頁／本体五、七〇〇円

新島襄の師友たち

【10月刊行予定】

本井康博著

キリスト教界における交流

新島襄をめぐる人々のなかからキリスト教にゆかりの深い人物、なかでも新島が属した「組合教会」（会衆派）という自派の関係者から30余名をとりあげた「交遊録」。

▼A5判・四五〇頁／本体四、二〇〇円

デンマーク人牧師がみた日本

明治の宗教指導者たち

カール・スコウゴール・ピーターセン原著

長島要一訳・編注

8月刊行

一九二一（明治44）年に来日したデンマーク人牧師、カール・スコウゴール・ピーターセンによる日本印象記『現代の日本から』を翻訳、本邦初公刊！

キリスト教者を中心に面談していく中で、一デンマーク人の目に映った明治日本とは……

▼四六判・三三八頁／本体三、七〇〇円

解説

『現代の日本から』成立の背景と本書の着眼点／デンマークにおける日露戦争後の日本観／カール・スコウゴール・ピーターセンと日本への視察旅行

カール・スコウゴール・ピーターセン『現代の日本から』

I 山並みを越えて

II 寺社と祭り

熊本／大阪／神戸／京都／奈良／日光

III 指導者たちとその性格

蘭田宗恵／村上専精／A・ロイド／植村俊平／尾崎行雄／大隈重信／松村介石／宮川経輝／海老名弾正／小崎弘道／田村直臣／植村正久／本多庸一／中田重治／内村鑑三／井深梶之助／原胤昭／山室軍平／賀川豊彦／矢嶋梶子

IV 訪問の成果

V 日本人の特徴

付録：宣教師イエンス・ウインテルの観察

内村鑑三『デンマーク国話』

ながしま・よういち：コペンハーゲン大学 DNP 特任教授。

和食文化 ブックレット

ユネスコ無形文化遺産に登録された和食

和食文化国民会議監修

【第一期・全10巻 3ヶ月に1冊刊行】

和食の典型的なスタイル、和食文化というべき食べ方、食器、しつらい、マナー、さらに和食の食材、調理法、盛りつけなど、一番基本となる所が学べるテキストシリーズ。

▼各巻 A5判・九六頁／本体九〇〇円

最新刊「9月刊行」

第4巻 和食と健康

渡邊智子・都築毅

好評発売中

第1巻 和食とは何か 熊倉功夫・江原綏子

第2巻 年中行事としきたり 中村羊一郎

第3巻 おもてなしとマナー 熊倉功夫・後藤加寿子

今後の刊行予定

第5巻 和食の歴史 原田信男

第6巻 材料と調理 大久保洋子・中澤弥子

第7巻 うまみの秘密 伏木亨

―だしと調味料―

第8巻 ふるさとの食べもの 今田節子・清綯

第9巻 日本酒と和食

第10巻 緑茶と和菓子

〔平成28年11月予定〕
〔平成29年2月予定〕
〔平成29年5月予定〕
〔平成29年8月予定〕
〔平成29年11月予定〕
〔平成30年2月予定〕



オンデマンド復刊書目一覧

受注生産のため、出荷に一週間ほどいただきます

2016年秋復刊予定

※表示価格は税別

中国五代国家論

山崎覚士著「初版二〇一〇年」

七、三〇〇円

日本中世の王権と権威

伊藤喜良著「初版一九九三年」

八、三〇〇円

鎌倉時代の朝幕関係

森茂暁著「初版一九九一年」

一〇、六〇〇円

近世の学校と教育

海原徹著「初版一九八八年」

七、五〇〇円

近世教育思想史の研究

日本における「公教育」思想の源流

辻本雅史著「初版一九九二年」

七、五〇〇円



ご予約承ります
お気軽にお問い合わせください



【古代】

平安期の願文と仏教的世界観 工藤美和子著

七、四〇〇円

平氏政権の研究 田中文英著

九、八〇〇円

【中世】

中世寺社信仰の場 黒田龍二著

七、八〇〇円

日本中世の政治権力と仏教 湯之上隆著

八、八〇〇円

崇徳院怨霊の研究 山田雄司著

六、四〇〇円

神仏習合の歴史と儀礼空間 嵯峨井建著

八、六〇〇円

翁の生成 渡来文化と中世の神々 金賢旭著

五、〇〇〇円

中世京都の民衆と社会 河内将芳著

八、八〇〇円

中世京都の都市と宗教 河内将芳著

六、八〇〇円

対外関係と文化交流 田中健夫著

一三、八〇〇円

織豊期の茶会と政治 竹本千鶴著

九、五〇〇円

【近世】

近世寺社参詣の研究 原淳一郎著

八、三〇〇円

近世吉野林業史 谷彌兵衛著

一一、一〇〇円

日光東照宮の成立 近世日光山の「荘厳」と祭祀・組織

八、五〇〇円

元三大師御籤本の研究 おみくじを読み解く

四、〇〇〇円

江戸時代唐船による日中文化交流 松浦章著

九、八〇〇円

明治前期の教育・教化・仏教 谷川穰著

七、五〇〇円

明治博物館事始め 椎名仙卓著

四、八〇〇円

2014年刊行図書一覧

古代・中世

日本古代の武具『国家珍宝帳』と正倉院の器仗 近藤好和著

怨霊・怪異・伊勢神宮 山田雄司著

東寺百世文書(十二) 子函三 京都府立総合資料館編

日本中世の地域社会と仏教 湯之上隆著

花園宸記第23回配本 宮内庁書陵部編

法制史料集 陽明書記録文書篇9 陽明文庫編

中世寺院社会と民衆 衆徒と馬借 神人・河原者 下坂守著

中世後期の香文化 香道の黎明 本間洋子著

『作庭記』と日本の庭園 白幡洋三郎編

大航海時代の日本と金属交易 平尾良光・飯沼賢司・村井章介編

在京大名細川京兆家の政治史的研究 浜口誠至著

住心院文書 首藤善樹・坂口太郎・青谷美羽編

近世・近代

緒方郁蔵伝 幕末蘭学者の生涯 古西義磨著

幕末期の老中と情報 水野忠精による風聞探索活動を中心に 佐藤隆一著

金鯨叢書 第40輯 史学美術史論文集 徳川黎明会編

歴史における周縁と共生 女性・穢れ・衛生 鈴木則子編

日中演劇交流の諸相 中国近代演劇の成立 陳凌虹著

住友の歴史 上巻 住友史料館編

住友の歴史 下巻 住友史料館編

志を継ぐ 新島襄を語る(十) 本井康博著

襄のライフは私のライフ 新島襄を語る 別巻四 本井康博著

日本庭園像の形成 片平幸著

技術と文明 第35冊(18巻2号) 日本産業技術史学会編

技術と文明 第36冊(19巻1号) 日本産業技術史学会編

幕末・維新の西洋兵学と近代軍制 大村益次郎とその継承者 竹本知行著

劇場の近代化 帝国劇場・築地小劇場・東京宝塚劇場 永井聡子著

宗教・美術・文学

蘭溪和尚語録 蘭溪道隆禪師全集 第1巻 佐藤秀孝・館隆志共編

死して巖根にあらば骨も也た清からん 寂室元光の生涯 児玉修著

近江の古像 高梨純次著

元伯宗旦の研究 中村静子著

講座 日本茶の湯全史 第2巻 近世 茶の湯文化学会編

片桐石州茶書 谷見・矢ヶ崎善太郎校訂

御茶湯之記 予楽院近衛家燕の茶会記 川崎佐知子校訂

茶の湯 思頼抄 戸田勝久著

月を愛でるうつろいと輝きの美 逸翁美術館編

風俗絵画の文化学Ⅲ 瞬時をうつすフィロソフィー

通天樓日記 横山松三郎と明治初期の写真・洋画・印刷 松本郁代・出光佐千子・彬子女主編

日本文学とその周辺 大取一馬編

日仏文学・美術の交流「トロンコフ・コレクション」とその周辺 富坂賢・柏木智雄・岡塚章子編

平家物語生成考 浜畑圭吾著

石毛弓 柏木隆雄・小林宣之編

2015年刊行図書一覧

考古・古代・中世

碇の文化史 石原渉著

平安時代陰陽道史研究 山下克明著

日記・古記録の世界 倉本一宏編

正倉院宝物と古代の技 木村法光著

九条家本延喜式(四) 東京国立博物館古典籍叢刊編集委員会編

西山地蔵院文書 京都大学史料叢書6 早島大祐編

花園院宸記 第24回配本 宮内庁書陵部編

中世アーカイブズ学序説 上島有著

日本中世の環境と村落 橋本道範著

一五〇〇円

一八〇〇円

九〇〇〇円

七八〇〇円

二五〇〇円

一五五〇円

一五〇〇円

一五〇〇円

一五〇〇円

一五〇〇円

一五〇〇円

一五〇〇円

二八〇〇円

二八〇〇円

二八〇〇円

二八〇〇円

二八〇〇円

七〇〇〇円

七〇〇〇円

七〇〇〇円

七〇〇〇円

七〇〇〇円

一六四〇〇円

一六四〇〇円

一六四〇〇円

一六四〇〇円

一六四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

五八〇〇円

五八〇〇円

五八〇〇円

五八〇〇円

五八〇〇円

八五〇〇円

八五〇〇円

八五〇〇円

八五〇〇円

八五〇〇円

一五〇〇〇円

一五〇〇〇円

一五〇〇〇円

一五〇〇〇円

一五〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

三九〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

一三〇〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

八四〇〇円

近世・近代

近世の王権と仏教 大桑育著

近世日本の銅と大坂銅商人 今井典子著

大坂蔵屋敷の建築史的研究 植松清志編著

角倉一族とその時代 森洋久編

前野良沢生涯一日のごとく 鳥井裕美子著

備前岡山の在村医 中島家の歴史

緒方洪庵の「除痘館記録」を読み解く 中島医家資料館・中島文書研究会編著

徳川社会と日本の近代化 笠谷和比古編

禁裏公家文庫研究 第五輯 田島公編

幕藩政アークカイブズの総合的研究 国文学研究資料館編

天下人の神格化と天皇 野村玄著

住友史料叢書 第29回 札差証文一 住友史料館編

熊沢蕃山の思想冒険 山田芳則著

近世の公家社会と京都 集住のかたちと都市社会 登谷伸宏著

技術と文明 第37冊(19巻2号) 日本産業技術史学会編

近代日本の都市社会政策とマイノリティ 歴史都市の社会史

近代日本へ陳列所研究 三宅拓也著

万国博覧会と人間の歴史 佐野真由子編

水系都市京都 ウィンフラと都市拡張 小野芳朗編著

京都近代の記憶 場所・人・建築 中川理著

美術 基礎茶式 中国茶道研修方法 呉遠之著

茶と室内デザイン 小泉和子編

セザンヌと鉄斎同質の感動とその由縁 山岸恒雄著

茶湯百亭百会 顕考院本(三) 白菊顕成著

器を楽しむ 逸翁の茶懐石 逸翁美術館編

正倉院の香薬 材質調査から保存へ 米田該典著

琳派響きあう美 河野元昭著

中国南北朝隋唐陶俑の研究 小林仁著

宗教・民俗・文学 雪叟紹立雪叟詩集訓注 芳澤勝弘編著

仏教と社会 第23回国際仏教文化学会実務委員会編

神話・伝承学への招待 斎藤英喜編

世界喫煙伝播史 鈴木達也著

和食とは何か 和食文化ブックレット① 熊倉功夫・江原純子著

響きあう東西文化 マラルメの光茫、フェノロサの反影 宗像衣子著

2016年刊行図書一覧(8月現在)

古代

日本古代国家の農民規範と地域社会 坂江涉著

平安王朝の葬送 死・入棺・埋骨 龍谷寿著

中世・近世

今村家文書史料集 上巻 中世・近世編 今村家文書研究会編

織豊期主要人物居所集成(第2版) 藤井讓治編

会沢正志斎書簡集 大阪大学会沢正志斎書簡研究会編

近世大名のアーカイブズ資源研究 松代藩・真田家をめぐって

江戸後期儒者のフィロロギー 原典批判の諸相とその国際比較 国文学研究資料館編

江瀬淡窓 高橋昌彦編著

住友史料叢書 第30回 年々記一 住友史料館編

幕末外交儀礼の研究 欧米外交官たちの將軍拜謁 佐野真由子著

近世 デンマーク人牧師がみた日本 明治の宗教指導者たち 長島要一訳・編注

吉田清成関係文書 第6巻 書類篇2 京都大学史料叢書15

京都大学文学部日本史研究室編

今村家文書史料集下巻 近代編 今村家文書研究会編
記念植樹と日本近代 林学者本多静六の思想と事績 岡本貴久子著
戊辰内乱期の社会 佐幕と勤王のあいだ 宮間純一著
近代日本のユダヤ論議 宮澤正典著
技術と文明 第38冊(20巻1号) 日本産業技術史学会編
二〇〇〇円

美術

花道の思想 井上治著
一八〇〇円

陽明文庫蔵 舞絵(舞楽散楽図)・法隆寺旧蔵 指鼓
二七〇〇円

上野学園大学日本音楽史研究所編

園城寺の仏像 第1巻 智証大師篇 園城寺の仏像編集委員会編
二〇〇〇円

熊倉功夫著 第1巻 茶の湯・心とたち 熊倉功夫著
七〇〇〇円

墨と響きあう 町田泰宣画集 町田泰宣著
三〇〇〇円

篁篋の研究 東アジアの寺院荘園と絃楽器 中安真理著
六〇〇〇円

京都実相院門跡 宇野日出生編
二〇〇〇円

宗教・民俗・文学

変容する聖地 伊勢 ジョン・ブリン編
二八〇〇円

売茶翁の生涯 ノーマン・ワデル著
三五〇〇円

年中行事とときたり 和食文化ブックレット② 中村羊一郎著
九〇〇円

おもてなしとマナー 和食文化ブックレット③ 熊倉功夫・後藤加寿子著
九〇〇円

没理想論争とその影響 坂井健著
八九〇〇円

俳句とスペインの詩人たち 田澤佳子著
五〇〇〇円

マチャード、ヒメネス、ロルカとカタルーニャの詩人
三八〇〇円

江戸文化が甦る 石毛弓・柏木隆雄・小林宣之編

トコワ・コレクションで読み解く琳派から溝口健二まで

★公費リストをwebで公開中！

何を買うべきか迷っている、もしくは図書の選定が面倒だなどと思われる方、刊行年度別＋ジャンル別に一覧表を公開しています。注文欄にチェックするだけ手間要らず！是非ご活用ください。



ネット書評サポーター募集

ご自身のブログやSNSで本書の書評コメントを書いていただける方に、書籍を献本します。

◎応募要項◎

募集書目…「千種」物語(仮)―二つの海を渡った唐物茶壺

世界遺産と天皇陵古墳を考える(仮)

利休の茶の花

募集内容…書籍ごとの募集です。対象書籍は右記3点(25・32頁掲載)。

募集人数は各3名、締切は10月31日です。

字 数…特に制限しませんが最低でも800字以上はお書きいただくようお願いいたします。

発表媒体…ご自身のブログ、facebookなど、インターネット上で一般公開されているもの。

アマソンのレビューなどネット書店のレビューは対象外です。特定の範囲にしか公開されていないもの、一時的にしか公開されないものは除きます。

facebookの場合は、投稿の公開範囲を「公開」にしてください必要があります。

発表期限…書籍送付後3か月以内に公開してください。

申込方法…メール(pub@shimbunka.co.jp)・FAX・郵送で左記の項目をお知らせ下さい。

★書評していただける書籍
★発表する媒体

★(媒体を確認できるURL(アドレス)をあわせてお知らせ下さい)
★申込に当たってのアピールポイント

★お名前・ご所属・書籍お送り先住所・電話番号・メールアドレス

審査結果の通知…各書籍募集締切後、結果をお知らせします。

審査の内容についての問い合わせには応じられませんのでご了承下さい。

世界遺産と天皇陵古墳を考える(仮)

仁徳陵か、大山古墳か？

今尾文昭・高木博志編

百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録運動のなかで表面化した問題を整理。天皇陵古墳の未来をとらえるための問題提起。

定価未定

「千種」物語(仮)

二つの海を渡った唐物茶壺

竹内順一／岡佳子／ルイズ・A・コート

／アンドリュウ・M・ワツキー編

フーリア美術館所蔵の唐物茶壺「千種」。日米中の研究者による論考と、カラー写真を掲載した図録。

予価三、〇〇〇円

評
書
タ
ー
集
募
集
31
頁
詳細は

日本的時空観の形成(仮)

吉川真司・倉本一宏編

古代太上天皇の研究

中野渡俊治著

予価五、四〇〇円

定価未定

慶安手鑑(仮)

増田孝編

定価未定

禁裏・公家文庫研究 第六輯

田島公編

定価未定

神楽と祭文の中世(仮)

井上隆弘・斎藤英喜編

定価未定

高雄山神護寺文書集成

坂本亮太・末柄豊・村井祐樹編

二一、五〇〇円

守護所・戦国城下町の構造と社会

石井伸夫・仁木宏編

六、六〇〇円

豊臣政権の東国政策と徳川氏 佛教大学研究叢書
片山正彦著 予価五、八〇〇円

茶の湯にみる異文化交流
スムットニ一祐美著 予価五、〇〇〇円

新小堀遠州の書状(仮)
小堀宗実著 定価未定

描かれた祇園祭(仮)
八反裕太郎著 予価六、五〇〇円

徳川吉宗の武芸奨励(仮)
横山輝樹著 予価七、五〇〇円

住友史料叢書 31 年々諸用留十二番
住友史料館編 予価一〇、五〇〇円

近代化と空間システム(仮)
中川理編 定価未定

大名庭園の近代
小野芳朗・本康宏史・三宅拓也著 定価未定

萬年社と大阪の広告史研究(仮)
竹内幸絵・難波功士編 予価五、〇〇〇円

海賊史観からみた世界史の再構築(仮)
稲賀繁美編 予価九、五〇〇円

パリ万国博覧会とジャポニスム 寺本敬子著
初期日仏交流と「日本」像の形成 予価六、〇〇〇円

京都近代美術工芸のネットワーク 予価二、八〇〇円
並木誠士編

現代中国茶文化考 予価四、五〇〇円
王静著

——思文閣グループの逸品紹介——

美の縁

び

よすが



◆ Vessel ◆

はたけ やま こう じ
畠 山 耕 治

銅と錫の他に、本作には鉛を流し込んであり、その砕けた鉛の粒が所々に浮き上がって表面に現れている。130度にも加熱された青銅と鉛が鑄型に流しこまれた複雑な表面は、まさに畠山耕治が青銅という素材と壮絶に戦った記録として「景色」となり、見る人を圧倒する。

以前に作家と泉屋博古館に御一緒にすることがある。殷や周時代の青銅器を食い入るように見つめながらも、首をかしげておられた姿が印象的であった。當時国の威信をかけて造られた青銅器は、未だにその薄さ、軽さ、意匠の細かさなどがどのように造られたのか、解明に至っていないという。青銅という素材に魅了され、素材に宿る「意識」を引き出す為に、今日も高岡の蔵の中で畠山耕治の挑戦は続いている。

(ぎ)やらしい思文閣・山内徳太郎

上部が開いた円筒状の非常にシンプルな形ながら、圧倒的な存在感を持つ青銅器である。本作品は「惣型」という茶の湯釜を作る際に用いる技法で作られている。砂と粘土を混ぜた土で形の輪郭にあわせた型紙の板を直接回転させて型を作り、内側に土を詰めて隙間に金属を流し込む。青銅の原料である



美術品の架け橋、 思文閣大入札会

年四回開催している思文閣大入札会。
お客様のもとで受け継がれた価値ある美術品を、
求めている方へとお引き合わせします。

ご出品をご希望の方は、まず査定のお申し込みを

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
<http://www.shibunkaku.co.jp/>
satei@shibunkaku.co.jp



思文閣京都本社は、昨秋、約二十年ぶりの改装を終え、
時代や形式を超えて生きるすぐれた美を展覧するに
ふさわしい空間になりました。

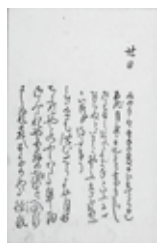
ぜひご来店くださいませ。

SHIBUNKAKU

思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
<http://www.shibunkaku.co.jp/>
info@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録



新花摘

全一冊

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・
古地図・錦絵など、あらゆるジャンルの
商品を取り扱っております（年4回程度
発行）。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部
までお問い合わせ下さい。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)752-0005 FAX(075)525-7155
<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>
kosho@shibunkaku.co.jp



ヤン・ヨンリアン展

Yang Yongliang Exhibition
Time Immemorial

思文閣福岡	2016.10.22[土]—30[日]
思文閣銀座	2016.11. 5 [土]—13[日]
思文閣京都本社	2016.11.19[土]—30[水]

SHIBUNKAKU

思文閣

〒605-0089

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
tel: 075-531-0001 gallery@shibunkaku.co.jp